



「森の農業」が文明を救う

安田喜憲「環境考古学のすすめ」
(2001.10, 丸善ライブラリー)

[<http://www.trcco.jp/trc/book/bookidc?JLA=01049760>]

1991年、著者のグループは、歴史の時代目盛の精度を飛躍的に向上させる発見をしました。それは年輪と同じように毎年形成された湖底の縞状の堆積物である「年縞(ねんこう)」で、そこに含まれる花粉やプランクトンの微化石、あるいは粘土鉱物や黄砂を分析することにより「過去数万年の気候変動や植生変遷を数年単位で復元できる」というものです。

この手法により、古代文明が栄えたメソポタミアや地中海沿岸地域、イースター島、あるいは中国の長江流域は、いずれもかつては鬱蒼とした森林に覆われていたことが明らかとなりました(例えばレバノン杉)。しかしながら、やがて家畜を連れた畑作牧畜民が爆発的に拡大するなかで森林が徹底的に破壊され、その結果、文明は次第に衰退して行ったのです。また、ヨーロッパ人が最後の新天地として入植したアメリカでは、わずか300年の間に実に森林の80%が破壊されたことも紹介さ

れています。

これらの地域に対し、日本では、里山の下草(あるいは鰯などの海産資源)を水田の肥料にすることによって、森と水田との間に循環系が維持されてきました。日本では「森の農業」が行われ「森の心」が守られてきたというのです。現在、1億2千万人も人口を擁する小さな島国で、国土の2/3にも相当する森林が維持されているという「人類史における奇跡」は、単に温暖多雨という気象条件によるものではないとします。

また、著者は、21世紀半ば頃にはインド・ヨーロッパ語族と漢民族が世界を支配すると予想します。そのなかで、「森の民としての日本文明(日本人の心、風土、森のあり方、ライフスタイル)」を受け継ぎ伝えて行くこと、また、それを支えてきた伝統的な農林漁業をきちんと守ることが「日本が生き残れる唯一の道」であるとし、必要最低限の食糧自給の必要性も訴えています。

さらに著者は、歴史とは自然と人間が偶然一体となって相互に影響しあいながら形成されてきたものであるとします(「文明の環境史観」)。したがって、人間の存在を絶対視する西洋の歴史観や社会科学では人類の新しい未来は切り開き得ないとし、「日本の風土の下で醸成された円環的循環史観、稲作の平和共存史観、自然への畏敬の念をもとに醸成された風土史観」が見直される必要があると訴えています。

(りえぞん No.15, 2002/3/27)

注：このコラムは、行政部局等と当研究所との間の連携・情報交換の手段として霞が関分室が発行している連絡誌「りえぞん」において、農林水産政策や経済学を考えるヒントとなりそうな書籍や論文の内容を「ほんのさわり」だけ紹介することを目的として連載しているものです。